

第1章 GIGAスクール構想

文部科学省のGIGAスクール構想を受け、本県においても各自治体において「1人1台端末」「高速大容量の通信ネットワーク環境」の整備が進められました。本年度から1人1台端末が本格的にスタートし、小学校1年生から中学校3年生までの全児童生徒が、端末を用いて学習に取り組んでいます。これらのICTを最大限に活用しながら、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められています。

ここでは、GIGAスクール構想の理念と本地区における各市町の取組を中心に紹介します。

1 GIGAスクール構想の理念

(1) GIGA (Global and Innovation Gateway for All) スクール構想とは

GIGAスクール構想とは、「1人1台端末」と「高速大容量の通信ネットワーク」を一体的に整備することで、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化された学びを実現させるとともに、子供たち一人一人の資質・能力を一層確実に育成できる教育ICT環境を実現させるものです。

また、これまでの実践とICTを最適に組み合わせることで、これからの学校教育を大きく変化させ、様々な課題を解決し、教育の質の向上につなげていくことを目指しています。

例えば、以下のような学びの変化が期待されています。

《一斉学習》

画像や動画などを児童生徒の端末で共有することにより、授業への興味・関心を促すとともに、状況に応じて提示内容を拡大したり、教師による補足説明などを書き込んだりすることにより、児童生徒の理解促進を図ることが可能になります。

《個別学習》

デジタル教材などの活用により、自らの疑問について深く調べることや、自分に合った進度で学習することが容易になるとともに、一人一人の学習履歴を把握することにより、個々の理解や関心の程度に応じた学びを構築することが可能になります。

《協働学習》

一人一人の考えを即時に共有するとともに、多様な意見に触れることが可能になります。また、端末や電子黒板等を活用することにより、教室内の授業のみならず、他地域や海外の学校との交流学习において児童生徒同士による意見交換、発表などを行うことが可能になります。

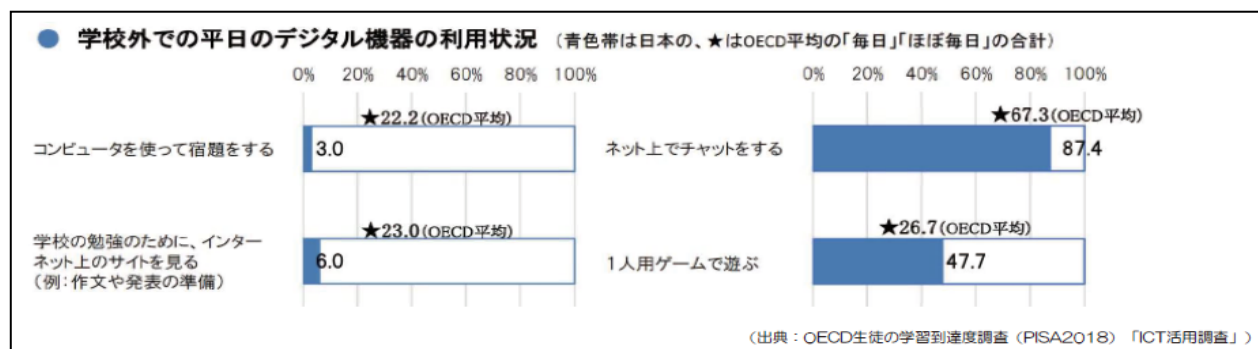
児童生徒自身がICTを「文房具」として自由な発想で活用できるよう環境を整えていくとともに、ICTを用いた学習活動の充実を図り、情報活用能力の育成を図っていくことが求められています。

(2) 導入の背景

Society 5.0時代を生きる子供たちに対し、学校では教育におけるICTを基盤とした先端技術等の効果的な活用が求められています。

OECD（経済協力開発機構）の生徒の学習到達度調査（PISA2018）における「ICT活用調査」では、日本の子供たちは学校外でのICT利用において、学習外での利用が多く、学習面での利用が少ないという課題が確認されました。OECD各国に比べて日本の学校におけるICT利活用は、世界から後塵を拝している状況がありました。

そのような中、令和時代のスタンダードな学校像として、全国一律のICT環境整備が急務となりました。



2 大田原市の取組

(1) 方針

大田原市では、「ICTの有効活用により児童生徒のさらなる学力向上を図る」ことを目標に活用を進めています。さらに、「①児童生徒一人一人に合わせた学習を進める。②将来の生活や仕事につながる使い方を身に付けさせる。③自分自身を分析し対策を講じる力(メタ認知)を育てる。」ことを具体的な目標として、パソコン活用の日常化や授業での活用に取り組んでいます。

(2) 実践例

ア パソコン活用の日常化への取組(ヘルスチェック)

児童生徒の情報活用能力の向上のため、本年度から市内全ての小中学校でデジタル健康観察(ヘルスチェック)を実施しています。児童生徒は、登校するとすぐにパソコンを開き、体温や風邪等の症状の有無を入力します。悩みや嬉しかったことなども記入できるため、情報活用能力を育てながら心のケアにも役立てています。

デジタル健康観察(ヘルスチェック)

イ ICT活用推進研究事業

本年度、ICT活用推進研究事業として研究校6校を指定し、3つの研究課題「(ア)情報の蓄積と活用(ポートフォリオ)」、「(イ)遠隔教育」、「(ウ)授業での活用」を研究しています。研究校では、視察の受け入れや情報の発信を行うとともに、公開研究発表会を通して市内の教職員へ成果を公開し、データを共有しました。



ICT活用推進研究事業公開研究発表会

(ア) 情報の蓄積と活用(ポートフォリオ)

A小学校では、自らの学びや生活の記録を電子データとして記録し、振り返ることなどを通して、学習や生活の意欲向上、適切な目標設定につなげています。

《事例》

- ・新体力テストの結果を専用のシートに入力し、今後の目標を設定しています。
- ・各児童が調べた言葉を1つのシートに入力し、学級の辞書として活用しています。
- ・児童が学校行事の振り返りを記録し、次年度の目標の設定や振り返りに活用しています。



広報おたわら

(イ) 遠隔教育

B中学校区では、3小学校と1中学校で遠隔交流学習や遠隔合同授業、教科の学びを深めたり広げたりするために外部人材とつないだ遠隔教育を実施しています。

《事例》

- ・小学校の遠隔合同授業を中学校教師が参観し、専門的なアドバイスをしています。
- ・海外の同年代と交流したり、職場見学をリモートで実施したりと学びを広げています。
- ・3つの小学校が単元を通して遠隔合同授業を実施しています。

(ウ) 授業での活用

C中学校では、数多くの研究授業実践とともに小中合同での授業研究会を実施し、授業での効果的な活用を研究しています。





《事例》

- ・国語では、自分の書いた意見文を吟味する際に、コメント機能を用いて生徒が相互に評価することなどに活用しています。
- ・社会では、単元を貫く問いを設定し、学習の見通しや振り返りを行う活動、収集した情報を分析し他者へ説明する活動に活用しています。
- ・理科では、探究の過程(課題の発見、仮説の設定、計画の立案、観察・実験、考察など)を記録に残し、共有したり、振り返ったりすることなどに活用しています。

3 那須町の取組

(1) 方針

那須町では、『～夢・感動あふれる人づくり～』のスローガンを実現するために、児童生徒の個別最適な学びと社会とつながる協働的な学びを進めています。また、学習者用端末上の規制をできるだけ少なくし、児童生徒自身が使い方やモラルなどを考える機会を設けることで、自律できる那須町の子供たちを育てていきます。

<h4>よい使い方を考える・振り返る</h4>  <p>どうすればうまくいこうか この使い方とどんなことが学べるだろうか この使い方のどんなところがよかっただろうか 次はどんな使い方に挑戦してみようか</p>	<h4>権利を守る</h4> <ul style="list-style-type: none"> 撮影は相手の合意を得る 顔写真を大事に扱う 他の人の作品を使う場合は合意を得る 作品を大事に扱う 他の人を攻撃する目的でコンピュータを利用しない 個人情報インターネット上に公開しない
---	--

児童生徒への配付資料「タブレットを使うときのルール」より

(2) 実践例

ア 全教職員で分散教室の「目的」と「手段」を共有した取組

D小学校では、新型コロナウイルス感染症対策のために、2つの教室にクラスを分けて分散授業を行いました。児童は、端末につないだイヤホンを通して教師の声を聞き、共有されたワークシートやカードを使って学習しました。「何のために分散教室をするのか」「子供たちの学びで保障したいものは何か」を事前に教職員間で話し合い、共有を図りました。実際に授業を行った教師からは、「リモートで授業を行う上で、利点や課題を捉える良い機会となった」という声がありました。不登校傾向の児童においては、「家庭にいながら、教室の授業に参加できるメリットがある」という声がありました。



イ 1人1台端末を普段の学校生活に取り入れた取組

E小学校では、児童がアンケートをとったり、係活動のイベントを周知したりして、1人1台端末を日常的に活用する工夫をしています。また、授業の様子や個人の頑張りなどを個性豊かな動画にまとめ、朝会で各教室に配信しました。6年生は町独自の教科「NA i S Uタイム」の防災学習を生かし、東日本大震災で被災した福島県大熊町立大野小学校の6年生と交流学习を行いました。今後は修学旅行で同校を訪問し、更に交流を深めます。



ロイロノートで伝え合う(2年)

1人1台端末の導入により、AI搭載型ドリルで個人の学力に応じた問題に取り組ませることができるようになりました。個別最適化された学習を今後も進めていきます。

さらに、町全体で導入している学習支援ソフト「ロイロノート」を授業中だけでなく、家庭学習でも有効に活用しています。長期休業中には、印象に残った出来事をまとめたカードや、自由工作の画像をいつでもオンラインで提出できるようにしました。また、コロナ禍で制限のある家庭科の調理実習を自宅で実施し、その様子を動画や画像で提出できるようにしました。



Zoomで大野小との交流(6年)

今後、連絡帳の記入や提出物管理には「Google Classroom」を活用していきます。保護者との連絡がスムーズになり、教師の働き方改革へ繋がると考えています。

4 那須塩原市の取組

(1) 方針

那須塩原市では、児童生徒の情報活用能力を育成するとともに、個別最適な学びと協働的な学びを充実させることを、ICT活用の目標としています。ICTを活用することで教育の質を向上させ、全ての児童生徒の可能性を引き出すための取組を進めています。

<参考>広報なすしおばら 2021年11月号「特集 ICTが拓く子どもの学び」】

<https://www.city.nasushiobara.lg.jp/material/files/group/4/20211020full.pdf>

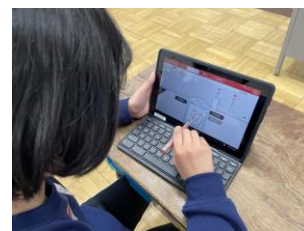


(2) 実践例

F小学校では、「いちご一会とちぎ国体」に向けたのぼり旗（北海道用）を作成するに当たり、1人1台端末を活用して話し合いを実施しました。児童が調べたことを「Jamboard」を使って班ごとに共有し、KJ法を用いて意見をまとめました。自分の考えを表現することが苦手な児童もICTを活用することで積極的に参加する様子が見られました。さらに、学級全体の意見を可視化することで、様々な視点で物事を考える機会となり、話し合いが深まりました。

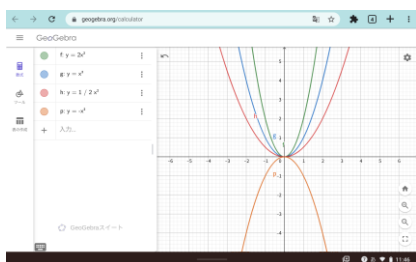


本市で導入されている「スマイルネクスト※」には、キーボード練習やオンライン学習ドリル等のソフトがあり、児童はそれらを活用しています。また、休み時間や家庭に持ち帰ったときにも取り組み、自分のペースで知識や技能を習得しています。オンライン学習ドリルは、全学年（小学1年から中学3年まで）の学習問題に取り組むことができるため、基礎・基本から丁寧に復習して学力の向上につなげています。児童が時間を作って進んで取り組む様子が見られ、個別最適な学習となっていることが分かります。



G中学校では、「GeoGebra」を数学の授業で活用しています。個別学習でグラフを作成し、協働学習で複数のグラフを比較し、それぞれの特徴について考える活動を行っています。図形の合同や相似の学習では、画面上の図形を移動させたり回転させたりすることができるため、理解をより深めることができます。また、社会の授業では小テストを「GoogleForms」で実施し、毎時間の学習理解度を把握、分析して授業改善に生かしています。さらに、理科の授業では、端末のビデオ撮影機能を活用して実験の様子を撮影し、授業の振り返り時に活用しています。

知識や技能を活用して思考する場面では、話し合いに「Jamboard」を用いることで、他の班の意見を参考にしながら思考を深めることができ、協働的な学びにつなげています。



※ 小中学校向け学習クラウド「スマイルネクスト」は、オンライン学習ドリルや協働学習ツール、情報モラル等を含む1人1台端末で利用できる学習支援ソフトです。